

ひとりごと

親知らず

私は3年前から歯列矯正の治療のため、歯科医院に定期的に通院している。社会人になって2年目の冬、親知らずの抜歯のため久しぶりに歯科医院に行ったことをきっかけに、幼い頃できなかった矯正治療をする決心をした。

3年前に始めた矯正治療も今はほぼ終盤で、就寝中にリテーナーと呼ばれる歯型をはめて固定するだけとなった。もともと3週間に1度通院していたが、つい先日歯医者に行った時、次回は半年後でいいですよと言われた。

「半年後」という言葉を聞いた時、この治療にかかった3年間が走馬灯のように頭をめぐる。

治療当初は、虫歯でもない正常な4本の歯を1か月に1本のペースで抜いたのだが、抜歯という行為に毎回不安と恐怖を感じていたなとか。歯をきれいに並べていくための器具とワイヤーを装着した直後は、レタス一枚を食べるのが苦行ほど歯が痛くなって、しばらくおかげ生活だったなとか。

そんな大変で辛かった思いをしながらも、今はきれいに並んだ歯を鏡で見ると、矯正治療をして良かったと心底思っている。

そして、この経験は、今私が直面している苦難に通じるものがあるのではないとも感じている。

その苦難とは、地方自治体で住民税の課税業務しかやったことのない自分が、この春から文部科学省に派遣研修生として勤務するようになったことで、国と地方との仕事の進め方やスピード感の違い、また教育分野という自分にとって未経験の分野を扱うことに戸惑い、毎日不安にかられていることである。職場の方々には優秀で、自分が本当にこの職場に来て良かったのだろうかと思ひ、気分が落ち込むことも多々ある。

こんな状態でも職場に出勤することが出来ているのは、生活面でサポートしてくれたり、精神面で励ましてくれる母がいるからである。

私の歯列矯正のきっかけを作ってくれた「親知らず」。その語源は諸説あるが、昔の日本人の寿命が32～44歳頃で早く、その歯（親知らず）が生える20～25歳には生みの親が亡くなっていることが多いため「親知らず」となったという説がある。

今の時代は日本人の寿命が延び、私自身親知らずが生えてきて抜いた後も、こうして親と一緒に人生を生きていられ、支えてもらっていることが本当にありがたいと感じる。

そして、矯正治療の時のように、この派遣研修を、辛かった気持ちを上回るくらい心底から誇れるような2年間にしたいと前向きに強く思った。

(K・K)